

5歳にして私の自覚から化身教義へ

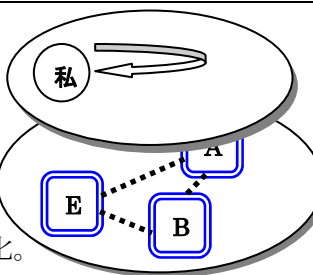
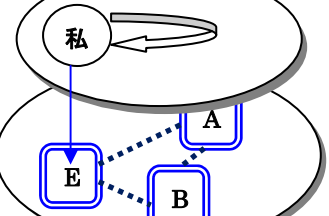
渡辺 恒夫
(東邦大学)

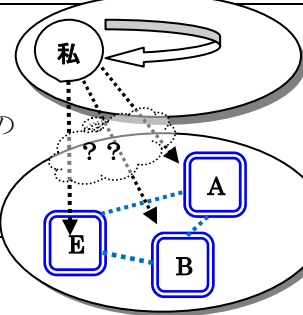
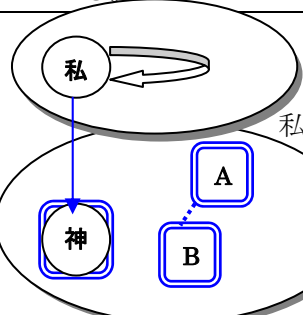
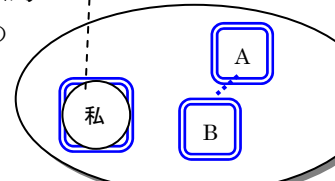
企画者によって「私」の科学と名付けられた、事例収集に基づく自我体験(I-am-me experience)・独我論的体験(solipsistic experience)の経験的研究を始めたのは、学生の間から「偶発的事例」が寄せられるようになったことがきっかけだった(渡辺、2002,2009)。その際、他者の独我論的体験は論理的に偽になってしまうというパラドクスゆえ、私は、すべての事例テキストを、「自分で書いたことさえ忘れて抽斗に仕舞い込んでいたテキストと再対面したものとして読む」という、「現象学的還元」の読み方を用いている。あたかもではなく字義通り自分が書いたものとして読むのである(この読み方は、後出の「体験の深さによる人格同一性説」と整合的である)。

ここでは、そのようにして収集した多数の調査事例・偶発的事例中、5歳にして「私は私だ」の自覚(自我体験)から、「意識の超難問」を経て「私は神だ」の化身教義(独我論的体験)に至った、事例「エミリー」を取り上げ、現象学的に分析解明する。

事例エミリーとは、リチャード・ヒューズの海洋小説『ジャマイカの烈風』(1923)の中で、9歳の少女に託して描かれる、作者5歳時の実体験である。この挿話は、フロムの『自由からの逃走』でもサルトルの『ボードレール』でも自我の目覚め例として論じられ、現象学者シュピーゲルベルグによって自我体験研究の出発点に置かれたが、三者とも、挿話の前半部分のみ引用し、化身教義的ファンタジーが展開する後半をカットしている。後半にこそ自我体験→独我論的体験の展開の秘密があるのに。

表に現象学的分析を示した。左欄の原文(省略版)を、まず一通り読んでいただきたい。右欄が、「本質観取」の結果を、構造図解法によって示したもの。

<p>①何となく蜜蜂と仙女王のことを考えていると、そのとき突然、自分はたしかに自分だということが、心にひらめいたのであった。／彼女は両手の皮膚をたんねんにしらべてみた。これも自分のものだから。</p>	<p>私=私の自覚(自己回帰矢印で表現)の出現と共に内的体験世界が成立し、下側の自明性(自然的態度)の世界との間で世界が</p>	 <p>二重化。</p>
<p>②……／こんどこそ自分はエミリー・バス=ソーントンだ(……), というこの驚くべき事実を確信できた彼女は、真剣にその意味を考えはじめた。</p>		<p>私=E (Emily) という自明だった事実が、新たな驚きをもって再発見される。A,B,Eの間の点線は類的関係を表示。</p>
<p>③世界中のどんな人間にでもなれたかも知れないのに、自分を特にこの人間、エミリーにするようにした</p>		

<p>のは、どういう力なのだろう？無限の時のなかで特定の年に生まれるようにし、……？自分が自分をえらんだのだろうか、それとも神のしわざなのだろうか。</p>	<p>私=Eの再発見によって、なぜ私はAかBでなかったのかという、意識の超難問（三浦、2003）が生じる。</p> 
<p>④……神とは誰なのだろう？……ひょっとすると、あたし自身が神ではないのか？／彼女は、とつぜん、恐怖に打たれた。知っている人はいるのだろうか（つまり、彼女が——もしかして神で——ただの、どこにでもいる少女ではないということを知っている人が）？</p>	 <p>私がAでもBでもなくEである理由が、Eの類例なき特別さ（＝神であること）によって答えられる。Eが神である事態が、内円を付け加えることで表現されている。</p>
<p>⑤しかし、もし自分が神だったとしたら、水夫たちをみんな白ネズミに変えてしまったり、誰かの怪我を直してやったり、こういうことを、神として実行すればいいではないか？……今のところは、神は袖の下に隠しておく方が安全なのだった。</p>	<p>内的体験世界における私</p> <p>が「神」として、自然的態度（自明性）世界の中の内円へと回収されたため、世界の単一性が回復した。</p> <p>私はEであると同時に神である！</p> 

表をまとめると、次のようになる。私は私であるという内的体験によって世界が二重化したため、私はエミリーであるという自明性が破れ、なぜ私は他の誰かではないかと言う意識の超難問が生じ、その答えが、エミリーの類例なき特別さに求められた。類例なき特別さと、類的存在を、二重に生きる化身教義がここに形成され、エミリーは自分が神であることを自覚した。それによって、世界の二重化は解消した。これが、現象学的に解明された事例エミリーである。化身教義とは、体験世界における類例なき座標原点としての私と、客観的世界における「私類」（私達）の中の一例としての私という、私の二重性への解決なのである。なお、化身教義は独我論の一種である。私にのみ内面があって他者にはない、というのが普通の独我論であるが、表の最下段の図では、私にのみ超内面（＝神）があって他者には内面のみしかない、となって、構造上同型となる。

以上は心理学的現象学による分析で、宗教心理学・精神病理学にも関係するが、超越論的には、エミリーが私を自覚した瞬間の私は誰かという問題が立てられる。答えは、私は私だということである。これを、体験の深さによる人格同一性の説と称する。

<文献>

三浦俊彦. (2002). 意識の超難問の論理分析. 科学哲学, 35-2, 69-81. / Spiegelberg, H. (1964). On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry*, 4. 3-21. / 渡辺恒夫. (2003). <私の死>の謎 ナカニシヤ出版. / 渡辺恒夫. (2009). 自我体験と独我論的体験 北大路書房.